

[序章(80枚)] 01~(五大) 810枚) 絵葉書。収

■ 横浜本町通

春ひ園



タイトル:横浜本町通

年代:昭和戦前期

分類名:本町通り

分類番号:012-03

■当時の雑誌より:

「若尾ビルディング(本町館)

横浜のウォール街と見られる本町通りに聳ゆる摩天楼は若尾幾太郎氏の若尾ビルディングだ。大正十四年八月竣工を告げ、復興の魁をなしたのは此のビルディングである。鉄筋コンクリート造の七階建で総延坪一千坪外に地下室を有する横浜最大のものなることは何人も知るであらう。外壁、内構、床敷等一見建築の粋を表現すると共にその設備に至りては採光、照明、衛生、防火、暖房等最善の方法を尽し階段二ヶ所とエレベーターを設け何れの点から云つても最大最良最美のビルディングとして推賞に値するものである。」(「ビルディング素描(其の一)」『大横浜』1930年第3号)

備考:正面奥背の高い建物が本町4丁目の若尾ビル(1925(大正14)年築)。本町通りの南東側からのショ

ツ。絵葉書は1918(大正7)～33(昭和8)年刊。

☒ 閉じる

1

All rights reserved. Copyright(C) 2003 Museum of Yokohama Urban History
当館のページ内にある画像、文章等を無断で転載、引用することはできません。

蘇西本系譜

Enoden Official Site

江電

Enoshima Electric Railway

電車 バス 展望灯台 不動産情報 お得な各種割引券 江ノ島電鉄会社案内 江ノ電設備管理 江ノ電商事

第七章 社会情勢と江ノ電

第七章 社会情勢と江ノ電

第1回 関東大震災と江ノ電



関東大震災による腰越付近の被害(星野写真館所蔵)

大正12年9月1日午前11時58分、突如発生した関東大震災によって関東地方は一瞬にして壊滅状態に陥りました。湘南地区においても、多數の家庭や由緒ある神社仏閣が軒並み倒壊するなど被害は大きく、住民は避難生活を強いられました。川口村(片瀬町を経て昭和22年藤沢市に編入)における救援物資の配給は、江ノ電の片瀬(現江ノ島)駅構内でも行われ、被災者が長い列をつくっていたそうです。

当時、東京電灯(東京電力の前身)によって経営されていた江ノ電線(江之島線)もまた、発電所の崩壊や土砂流失による軌道の埋没をはじめ、随所で甚大な被害を受けています。その被害総額は、年間運輸収入の28%に及んだそうですが、復旧させるための投資力と、失った発電所に代わる電力供給源の確保等を考え合わせると、震災の発生が東京電灯時代であったことは不幸中の幸いといえましょう。

懸命の復旧作業は夜を徹して行われ、9月25日にはほぼ全線の運転が再開されました。この震災で開業以来活躍してきた老練である1号車を焼失しています。なお、1号車の焼失にあたって、新造車による補充はされませんでしたが、同じ東京電灯経営の渋川線から車両を転用し、車両不足を補っています。ちなみにこの渋川線は、江ノ電線同様大正10年に同社が買収した鉄道で、渋川を起点に高崎・新前橋・伊香保を結んでいました。

他方では、当時設立されていなかった当社においても、震災の発生は転機となりました。『東海土地電気』の名で、茅ヶ崎ム鷺沼および辻堂ム辻堂海岸の鉄道敷設免許を得ていた発起人たちが震災を機に起業の断念を余儀なくされ、当社は、その意志を継いだ若尾義太郎によって設立されました。歴史に「もしも」という仮定はありませんが、もしも、震災の発生がなく若尾氏が経営に参画していないければ、当社による江ノ電線の経営は実現していないかもしれません。なぜなら同線は、当社が食指を動かす前に他者への譲渡が決まっており、それを譲り受けるには東京電灯と当社の経営に携わる同氏の存在が欠かせなかつたからであります。

—完—

(参考文献『江ノ電の100年』)

『江ノ電の100年』は、開業100周年記念事業の一環として平成14年9月に発刊された江ノ島電鉄のオフィシャル史料です。400ページにわたるその構成内容は、鉄道以外の事業にも焦点をあてることにより社史としての平準化をはかり、新たに発掘された史料や貴重な写真も多数収録しております。

『江ノ電の100年』に関するお問い合わせは下記までご連絡ください。

電話番号 0466-24-2711

(土・日・祝日を除く9:00~17:00)

メールアドレス webmaster@enoden.co.jp

[当方見聞録_目次へ](#)

[HOMEへ](#)

[よくあるご質問FAQ](#) [個人情報の取扱について](#) [サイトマップ](#) [お問い合わせ](#)

Copyright(C) Enoshima Electric Railway Co.,Ltd. All Rights Reserved.



湘南の顔として時代の潮流に乗る 江ノ島電鉄

SHINSEI STORY
ものがたり
Vol.6

明治35(1902)年 藤沢一片瀬間(現江ノ島)営業開始
明治43(1910)年 小町(現鎌倉)までの全線開通
平成14(2002)年9月1日 創業100周年



今や"湘南"の代名詞として多くの人に愛される江ノ電のある風景。春夏秋冬、四季を問わず、観光客に利用され、地元住民の生活の足としても、その存在は欠かすことができないだろう。その江ノ電も今年で創業104年。今日も明日も、江ノ電はノスタルジックな走行音を響かせながら、その歴史を刻んでゆく。

全国的な鉄道建設の波が湘南にもついに到来

明治20(1887)年7月の東海道線横浜—国府津間の開通や、明治22(1889)年6月の横須賀線大船—横須賀間の開通を背景として、商工業や観光で発展の兆しを見せ始めた湘南。東京や横浜の近郊地区として、多くの事業家たちが相次いで、藤沢と鎌倉を遊覧の拠点や避暑地として開発しようとして、鉄道建設に名乗りをあげた。

明治12(1879)年から5期にわたって神奈川県議会議員を務め、のちに衆議院議員当選を果たした中郡豊田村(現平塚市)の福井直吉は、各地で政治家たちが電気鉄道を立ち上げようとする様子に影響を受け、自らも計画を検討するようになる。そして県議員時代、共に県政を執った青木正太郎ら3名に呼びかけ、福井自身が発起人総代となり、「江之島電氣鉄道」旗揚げした。

江ノ電の歴史に幕が開く

明治35(1902)年9月1日、江之島電氣鉄道株式会社は、ついに営業を開始した。開業当日、藤沢昇降場では、もの珍しさも手伝って、終日多くの人々が、電車に乗り込む姿が見られた。第1期として開業したのは、藤沢—片瀬(現江ノ島)間の3.42 kmで、昇降場を10カ所設置した。開業当初の車両は、1等・3等合造車2両と3等車2両の4両態勢。藤沢—片瀬間の3等乗車運賃は、10銭だった。その後、片瀬—極楽寺間の第2期延伸工事を経て、明治43(1910)年11月4日には、藤沢—小町(現鎌倉)間10.27 kmに及ぶ全線が開業。藤沢—片瀬間の工事着工から8年9ヶ月の月日を費やした。



激動の時代超え、飛躍へ

全線開通もつかの間、明治44(1911)年10月3日、江之島電氣鉄道株式会社は、資金難により横浜電気に吸収合併される。その後、經營権はさまざまな事業主の手にわたりながら、大正15(1926)年7月10日には現在の会社の根幹となる江ノ島電氣鉄道株式会社(代表取締役若尾幾太郎)が発足。昭和3(1928)年7月1日には、東京電灯から同社江之島線を譲り受け、江ノ電線としての営業を開始した。



昭和初期には江ノ島—鎌倉間の乗合バス事業やハイヤー事業に参入するなど、運輸業全般で営業成果をあげていった。活況もつかの間、昭和12(1937)年には日中戦争が勃発。戦時統合により、東京横浜電鉄(現東京急行)の傘下となり、小田急電鉄や京浜電氣鉄道を合併しながら、のちに運輸通信大臣となる五島慶太の推進する交通事業の一元化で“大東急”的な一員となった。



終戦後、GHQの経済縮小政策の流れのなかで東京急行から分離したのも、個人的に江ノ電の大株主であった五島は、積極的な観光事業への参入を提言。五島の着想に沿って社名を「江ノ島鎌倉観光株式会社」に改め、江の島の開発に着手した。

計画の概要是、江の島島内の土地約8470坪と建物約770坪を買収または借り入れし、レクリエーション施設や展望塔を新設、観光バスに対応するための有料駐車場を経営しようというものだった。展望塔は、二子玉川の多摩川べりに兵士の訓練用として使用されてきた「よみうり落下傘塔」の転用を計画。「安藤廣重の絵にそんな塔はない」とするGHQか

らの反対の声を説得し、昭和26(1951)年3月には、「読売平和塔」として完成することになった。昭和30年代には、江の島島内に旅館「江の島館」や「江ノ島エスカー」、「ガーデン・パーラー」などを開業し、来島者の人気を集めた。

現在から未来、地域に愛される企業として

時代は昭和から平成に移り変わり、鉄道、自動車、不動産、観光の部門で着実に業務の幅を広げてきた江ノ島電鉄株式会社(1981年から現社名)。平成13(2001)年からは、第24代の代表取締役社長として森山寿雄が着任。平成14(2002)年9月1日には、開業100周年を迎えた。100周年を記念し、江の島展望灯台建替や藤沢市と共同した江の島植物園再開発などの事業を行った。今年6月14日には、小田急百貨店藤沢店の屋上に「湘南ベルマーレフトサルコート」を開設。また自動車部門の新たな事業として、高速バスの戸塚・大船・鎌倉・藤沢―京都・大阪なんば・堺間の運行を開始するなど、新たなビジネスの場を広げている。「湘南は観光地でもあり、生活の土地でもあり、テーマパークのような楽しくいいところ。今後も地域の文化や経済活動と融和しながら、さらに会社を発展させていきたい」、森山社長は笑顔で語った。(文中敬省略)



《参考文献》

江ノ島電鉄株式会社発行「江ノ電の100年」

〈写真上から〉

- 開業当時の車両(鶴沼停車場にて)と「開業75周年記念乗車券」に描かれた開業当初の車両(高麗共鉄の車両)と、(1902年)の車両と風俗(益山賀代子氏所蔵)
 - 昭和初期の江ノ電沿線案内図(小坂宣雄氏所蔵)
 - この春にデビューした新型500形。潮風を受けながら、鎌倉高校前駅付近を快走。左手には江の島が見える。
 - 江ノ島電鉄株式会社本社社屋(今年5月撮影)と第24代の代表取締役社長森山寿雄
 - 湘南を描き続ける画家・田口雅巳氏の作品にも江ノ電は多く登場。「夏の花(腰越)」

